

岩手県内の子どもと家族へのトータルケアおよび看護師の
ネットワーク促進に関する研究

研究代表者 教授 白畑範子 研究参加者 講師 原瑞恵 助教 柴田周子

<要旨>

本研究では、小児看護学において学生が講義内容と結びつけ、学生が子どもや家族のケア場面を想定し能動的に学修するシミュレーション教育の成果を明確にし、子どもと家族へのケアに携わる看護職の新人看護師教育の応用可能性を検討した。

1 研究の概要

シミュレーション教育は実際の臨床の場を再現した学習環境のなかで、学習者が課題に対応する経験と振り返りやディスカッションを通して、「知識・技術・態度」の統合を行う。小児看護では発達段階に応じた対応や、迅速かつ確かな判断と行動が求められるが、学生は子どもや家族への介入が困難な状況にあるため、子どもや家族のケア場面を想定したシミュレーション教育が必要とされる。本研究では、小児看護学におけるシミュレーション教育での経験や振り返り、能動的な学びから学生がそれからどのような学修成果が得られたか明らかにすることを目的として調査を行った。

2 研究の内容

小児看護学におけるシミュレーション教育では、以下のことを目標とし、取り組んだ。

1. 子どもの発達段階と症状、家族の状況を論理的に判断し、疾患を想定できる
2. 子どもの発達段階と健康問題、子どもをとりまく家族・地域・社会の状況をとらえ場面を想定し、統合的に考えることができる
3. 実践した看護ケアを振り返り、行ったケアの根拠を確認できる
4. 講義内容を振り返りながら、学生間で主体的に話し合うことができる

この小児看護学におけるシミュレーション教育の演習実施後、学生への学習効果を測るために無記名の質問紙調査を行った。

調査期間は平成 29 年 11 月から 12 月であった。質問内容はリッカー尺度を用い、シミュレーション教育の学修目標に沿って、子どもの状態と家族の状況を主体的に多様な側面から判断できたか、子どもや家族の状況をとらえ場面を想定し実践できたか、実践した援助を振り返ることができたか、学生間で主体的に話し合うことができたかを評価した。回収方法は留置法とし、個別の封筒にて質問紙を配布し、回答者が厳封をし、研究代表者のレポートボックスに投函することにした。この回答用紙は個別評価が終了するまで、事務室に保管した。得られたデータは統計分析し、自由記述については類似した内容をまとめた。

3 これまで得られた研究の成果

小児看護学領域の講義を履修した 3 年生 30 名に質問紙を配布し、18 名の回答を得た (回収率 60%)。

調査結果は、すべての項目において、学生の 9 割が学修目標を達成できたについて「とても思う」「まあまあ思う」と回答した。〈講義内容を振り返りながら、学生間で主体的に話し合うことができた〉については、6 割の学生が「とても思う」と回答し、自由記述には、「疾患を想定するためには、疾患を理解しなければ説明できない」、「数ある疾患の中から 1 つ選んで考えることで、たくさん調べた」があり、このシミュレーション演習では講義内容と結びつけ、学生が子どもや家族のケア場面を想定し能動的に学修することに効果的であったと考える。また、「どのタイミングで、子どもや家族に話していいかイメージができた」、「今、本当に必要な援助は何か話し合えた」、「緊急を要するかどうかで援助内容も異なる」と、小児看護学の講義を結びつけ、小児看護学における知識と技術を統合し、看護ケアを考えることにつながり、看護職における臨床判断への教育の基礎資料となった。

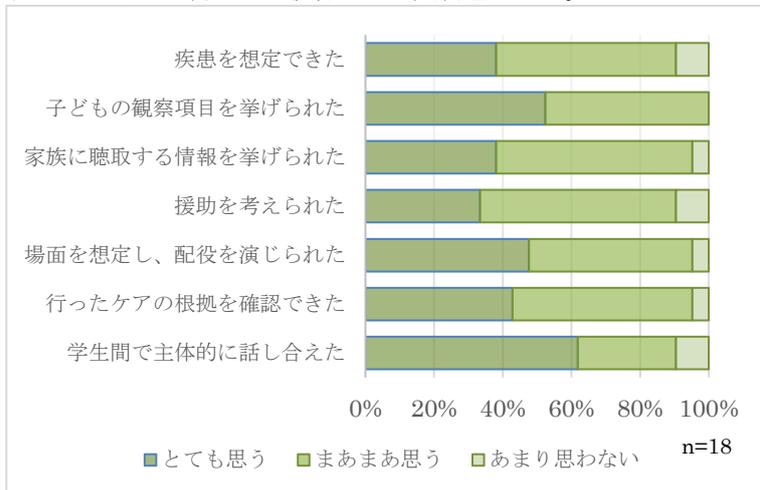


図 1：小児看護学におけるシミュレーション教育の学修目標到達度

4 今後の具体的な展開

小児看護学におけるシミュレーション教育は、臨床経験の少ない学生が子どもや家族の多様なケア場面を能動的に想定することができていたことから、小児看護に携わる看護職における複雑な場面での臨床判断への教育にも応用できると考えた。